

校内相談室における心理教育的アプローチの実践

野村 祥恵*・細溝 さやか*
小倉 正義**・平石 賢二***

1. はじめに
2. 実践の概要
3. 校内相談室における心理教育的アプローチの実施経過
4. 全校生徒の心理教育的アプローチへの認知
5. 被援助志向性との関連
6. おわりに

1. はじめに

スクールカウンセラーが学校で果たす役割として、治療的な意味をもったアプローチだけでなく、子どもの問題を予防するためのアプローチは重要である（たとえば、石隈、1999）。近年では、このような子どもの問題を予防することを意図した心理教育的プログラムについて多くの実践と研究が報告されている。しかしながら、スクールカウンセラーが心理教育的アプローチを行った報告や、校内相談室やスクールカウンセラーの機能と心理教育的アプローチの関連について論じたものは少ない。このことから、校内相談室の実践としての心理教育的アプローチについて検討することの意味があると思われる。

また校内相談室の相談機能との関連を考える上では、児童生徒の被援助志向性に注目することが有効である。水野・石隈（1999）によると、被援助志向性とは「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」のことである。そして、留学生や大学生の被援助志向性に関する研究では、援助者が自分の相談したことに対して期待通りに応えてくれないのではないかという不安を意味す

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程学生

** 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター研究員

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

る援助者の呼応性に対する不安と被援助志向性との間に負の関連があることが指摘されている（水野・石隈、2001；木村・水野、2004）。また、援助者の顔を知っていることが、援助者の呼応性に対する不安と負の関連があることも明らかにされている（堀田、2006）。このことから、校内相談室の相談員（以下、相談員）についてより知る機会となる心理教育的アプローチは、生徒の呼応性への不安を低め、被援助志向性を高めると考えられる。

以上のことから、本稿では、2008年度にA大学附属中学・高等学校（以下、A校）の校内相談室活動で実施した心理教育的アプローチの実践を報告し、校内相談室活動の機能の中で心理教育的アプローチがどのような意味をもつのかを検討する。また、校内相談室活動の一環として行われた心理教育的アプローチが生徒の相談員への被援助志向性に及ぼす影響について検討する。

2. 実践の概要

1) A校の校内相談室活動

A校の校内相談室は1997年9月に発足し、大学院の実習の一環として行われてきた。臨床心理士である教員の指導のもと、臨床心理学を専攻している大学院生により運営されている。2008年度は、博士課程前期課程の大学院生8名の相談員により、相談活動が行われていた。校内相談室は、A校の放課後にあたる平日の午後3時から5時まで開室され、その時間帯に生徒は自由に来室すること、あるいは予約して相談することが可能であった。本稿で取り上げる「よつばちゃんのワークショップ」（以下、ワークショップ）は、2007年度から校内相談室が行う心理教育的アプローチとして行われている。

2) 校内相談室における心理教育的アプローチの概要

①参加者

ワークショップへの参加生徒の募集は、校内相談室が毎月発行している広報紙（資料1）を通じて行われた。そして参加を希望する場合は、広報紙に載せた「ワークショップ申し込み用紙」を切り取り、クラスや名前（ペンネームも可）、グループで申し込む場合は参加人数などを記入し、「校内相談室ポスト」に投函する必要があることが説明された。この「校内相談室ポスト」は、予約相談をする際にも使用されているものである。

なお広報紙には、各回のワークショップに関連した内容で「もんしろ先生の心理学講座」を掲載した。これは、広報紙で得られた基本的な知識をワークショップで実際に体験できるよう構成することで、それぞれの内容により親しみやすく、また理解しやすくなると考えられたためである。

また、ワークショップが開催されることを知らずに校内相談室に来室していた生徒に関しても、本人の希望があれば当日参加を認めた。そのため、高校生を対象とした日に中学生が数人参加することもあった。

②実施場所

相談活動に使用している校内相談室の一室を使用した。相談活動で使用している際、この部屋には来室した生徒がリラックスしたり楽しんだりできるよう、机の上に画用紙やクレヨン、オセロ等が置いてある。しかし、ワークショップで使用する際は、それらの道具を移動させ、参加した生徒

が作業しやすく、余分な刺激のない空間を設定された。

③実施期間

2008年度のワークショップは、5月から1月までの間、計5回のセッションが実施された。また、この5回のセッション以外にA校の文化祭の企画として9月に、ワークショップと一環したテーマで高校生対象の講座が実施された。ワークショップは2月にも実施予定であるが、本報告では5月から1月までの5回のセッションについて述べる。

生徒の理解度や取り組みやすさを考慮し、同じテーマのセッションで中学生を対象とする日と高校生を対象とする日が別に設定された。

④実施時間帯

校内相談室が開室されている時間帯と重なる、15時半頃～16時半頃の約1時間であった。

3. 校内相談室における心理教育的アプローチの実施経過

1) 実施の流れ

ワークショップの基本的な流れは、相談員による導入、参加生徒による実践や話し合い、相談員によるまとめという順序であった。その後、参加した生徒は「振り返り用紙」を記入し、ワークショップの目的と照らし合わせて自身の体験を振り返るよう求められた（資料2）。また、ワークショップの感想として、「(1) 全体的に、今日のワークショップはどうでしたか?」、「(2) 今日の内容について、より興味がわきましたか?」、「(3) 今日の内容は、わかりやすかったですか?」の3つの質問に対して、(1) 満足したか（「満足」）、(2) より興味がわいたか（「興味」）、(3) わかりやすかったか（「理解」）の3項目について5段階で回答することが求められた（資料3）。

2) 実施内容

ワークショップの内容は年間テーマに沿ってすすめられた。年間テーマは2007年度が「パーソナリティ」、2008年度は「コミュニケーション」であった。

数人の相談員が順番にセッションの担当し、各セッションの内容について考案した。その後、担当以外の相談員とティーチングアシスタント（TA）、および実習指導の教員が参加するミーティングで検討、精錬された。

ワークショップの活動内容として、今回は2008年度にしぼって報告する。開催したワークショップは以下の通りである。

【第1回：2008年6月】

目的：「実際のコミュニケーションを知ろう」と題し、自分の意見を相手に伝えるように話したり、相手の意見をきちんと聞いたりする課題を通して、普段の自分のコミュニケーションの仕方に気づいてもらうことを目的とした。

内容：4軒の家のうち1軒に宝があると提示した上で、参加者に各家の様々な特徴が書かれたカー

ドを配布し、それぞれの情報を伝え合うことで、各家の様子や家同士の並び順などを把握して宝のある家が当てられるというゲームを行った。こうしたゲームの中での参加者同士のやりとりを通じて、自分の意見や情報を相手に伝わるように述べることができたか、他のメンバーの意見や情報を十分に聞くことができたか、グループの中で自分はどのような役割（聞き役、話し役、まとめ役など）だったか等を振り返ってもらい、自分のコミュニケーションに気づけるように設定された。

【第2回：2008年9月】

目的：「言葉を使わないコミュニケーション」と題し、普段意識していない、非言語コミュニケーションに注目することにより、非言語コミュニケーションの影響の大きさを実感してもらうこと、および、非言語コミュニケーションで意図したことを伝える難しさを知ってもらうことを目的とした。

内容：ある“嬉しい”内容を文章だけで提示した場合と、“嬉しそうに”提示した場合と、“不機嫌そうに”提示した場合とで、どのように印象が違うかを話し合ってもらった。

【第3回：2008年10月】

目的：「言葉を使って伝えよう！」と題し、言語コミュニケーションをすることで、自分の伝えたいことを言葉で伝える練習をすること、およびどのように伝えると相手に伝わりやすいかを考えてもらうことを目的とした。

内容：別の部屋にキャラクターや物の絵を用意しておき、一人の参加者がその絵を見て、他のメンバーがそれにそっくりな絵が描けるよう正確に言葉で説明してもらった。また、よく伝わらなかった部分については、後から質疑応答の時間を設け、言葉でのやり取りを行うことが求められた。最後に、言葉だけで説明することの難しさについて振り返ってもらった。

【第4回：2008年11月】

目的：「心で聴くってどういうこと？」と題し、人の話を聴くとき、話している相手にとってどのような聴き方が話しやすいか、話しにくいのかを考えて体験すること、および自分の態度が話し手の話しやすさに影響することに気づくことを目的とした。

内容：相談員のロールプレイを基に、“聴かない”態度と“聴く”態度の違いを考えてもらい、その上で実践するよう求めた。最後に、相手が話しやすい聴き方とはどのような態度なのか、どのような工夫ができるかについて振り返ってもらった。

【第5回：2009年1月】

目的：「アサーションへの第一歩」と題し、相手に言いにくい自分の意見を思うように相手に分かりやすく伝え、同時に相手にも納得してもらえるような主張の仕方を考えてもらうこと、および自分の意見を主張するときどのような言い方があるか、どのようにしたらうまく伝わりやすいのかについて課題を通して知ってもらうことを目的とした。

内容：あるキャラクターを用いて“攻撃的アサーション”、“非主張的アサーション”、“アサーティブなアサーション”の例を説明した後、具体的な場面を提示して、そのときどう言ったらよいかを考えて実践してもらった。また、他のメンバーのアサーションを聞いてどう思ったかという話し合いを通じて、日常で何かを主張するときによいところなどに気をつけるとよいかについて考えてもらった。

3) ワークショップにおける活動実績および感想から

2008年度のワークショップは、中学生が10名、高校生が28名（A校の文化祭企画で行った際の人数を含む）がワークショップに参加していた（Table 1）。第1回の参加者は中学生4名、高校生3名であり、第2回は中学生のみ実施し、参加は1名であった。また、第3回は中学生4名、高校生3名であり、第4回は中学生0名、高校生3名であった。最後に、第5回は中学生1名、高校生3名であった。なお、第2回の内容はA校の文化祭における高校生を対象とした企画として高校生に実施されており、16名の参加者が取り組んだ。

次に、ワークショップに参加した生徒が、全体的に満足したか、内容により興味を持ったか、内容を理解できたかについて検討するために、生徒の記入した得点の合計を求め、それを最高点（5点×参加人数）で割ることによってそれぞれの割合を算出した。その結果をTable 1に示す。ほぼ全ての回において、「満足」、「興味」、「理解」ともに高い評価が得られており、生徒がワークショップに参加する楽しさや意味を感じていることが窺われた。また、自由記述で感想を求めたところ「楽しかった」、「少し意識するだけでコミュニケーションが変わることがわかった」などが多く、このことから参加した生徒は概してワークショップに対して満足し、興味や理解を示している様子が窺われた。

実際、回を重ねることにより、ワークショップの課題に取り組みながら、にぎやかに生徒同士が話したり、「こういうときもあるよ」、「こういうときは違うけど、それは何で？」と課題から新たなアイデアや視点を出し合ったりする様子が見られるようになってきた。この理由として、まず参加する生徒が仲のいい友達同士であることが考えられるだろう。また、ワークショップに何度も参加することによって慣れたということもあると思われる。しかし、会話するとき、相手のほうをしっかりと見てうなずいて話すよう意識していたり、「私って主語が無いって言われるんだよねー」と気をつけて話そうとしたりしている様子からは、コミュニケーションという年間テーマに沿った内容を実施したことによる効果も窺える。つまり、互いにどのように話したらよいかを意識するようになったことで、よりスムーズに楽しく会話ができるようになっているのではないだろうか。さらに、こうした気づきは、単に他者とコミュニケーションするときのスキルとして身についただけでなく、各生徒が自分の特徴を知ることにつながることで、中学生や高校生の発達課題の一つであると言える自己理解のきっかけにもなったと思われる。

Table 1 ワークショップの実施経過と生徒の感想

回数	1	2	3	4	5	6	分科会	合計
月	6	9	10	11	1	2	9	
テーマ	実際のコミュニケーションを知ろう	言葉を使わないコミュニケーション	言葉を使って伝えよう!	心で聴くって どういうこと?	アサーションへの第一歩	上手な葛藤解決の方法 (未実施)	言葉を使わないコミュニケーション	
参加者数	中学生	4	1	4	0	1	未実施	10
	高校生	3	未実施	3	3	3	16	12
満足	100%	100%	94%	93%	100%		78%	89%
興味	91%	100%	97%	93%	100%		76%	87%
理解	100%	100%	100%	93%	100%		83%	92%
備考							未実施	

4. 全校生徒の心理教育的アプローチへの認知

1) 調査方法

A校では毎年、校内相談室から全校生徒に対して質問紙調査を実施している。質問紙は、担任教師によってクラスごとに集団で実施され、無記名で回収されるものである。なお、調査対象者には、回答は数値に置き換えられ個人が特定されることはないこと、回答は任意であり強制されないことが説明されている。この質問紙調査を用いてワークショップに関して以下のような内容で質問紙調査を行った。回収率は96%であった。調査時期は2008年11月であり、調査対象は中学生237名（男子：116名、女子：118名、不明：3名）、高校生335名（男子：155名、女子：170名、不明：10名）であった。有効回答は569名であった。

2) 調査内容

ワークショップの存在認識、参加意思、参加経験を測定した。ワークショップの存在認識は、校内相談室活動の中で知っているものの1つとしてワークショップを取り上げ、ワークショップを知っている人は○を、知らない人は空白のままにするという形で回答を求めた。また、ワークショップの参加意思については「ワークショップに参加したいと思ったことはありますか」、内容認識については「ワークショップでどんなことをしているのか知っていますか」、参加経験については「ワークショップに参加したことはありますか」という項目で尋ね、「はい」もしくは「いいえ」の2件法で回答を求めた。

3) 分析結果

最初に、ワークショップの存在認知と内容認知について χ^2 検定を行った。クロス集計の結果をTable 2に示す。その結果、有意な人数比率の偏りが示された($\chi^2=128.3$, $df=1$, $p<.01$)。これらの結果から、ワークショップの存在を知っている生徒は内容もまた認知していることが示された。しかし、内容認知、存在認知ともに知っている生徒よりも知らない生徒のほうが2倍以上いる

ことが示された。

次に、ワークショップの内容認知と参加意思について χ^2 検定を行った。クロス集計の結果をTable 3に示す。その結果、有意な人数比率の偏りが示された($\chi^2=118.8$, $df=1$, $p<.01$)。その結果、ワークショップの内容を知っている約半数がワークショップに参加してみたいと思っ
ていることが示された。また、内容は知らないが参加してみたいと感じている生徒も33名いることが示された。これらの生徒は、参加してみたいが内容がわからずにいる可能性が示唆された。

これらの結果から、まずはワークショップそのものの存在や、内容をよりいっそうPRしていくことが必要だと考えられた。

Table 2 ワークショップの存在認知と内容認知のクロス集計

		内容認知		合 計
		知っている	知らない	
存在認知	知っている	52	115	167
	知らない	2	398	400
合 計		54	513	567

Table 3 ワークショップの内容認知と参加意思についてのクロス集計

		内容認知		合 計
		知っている	知らない	
参加意思	あり	30	33	63
	なし	24	478	502
合 計		54	511	565

次に、ワークショップの参加意思と参加経験の χ^2 検定を行った。クロス集計の結果をTable 4に示す。 χ^2 検定の結果、有意な人数比率の偏りが示された($\chi^2=107.05$, $df=1$, $p<.01$)。これらの結果から、参加意思のある人のうち約37%である17名の生徒が実際に参加していることが示された。また、参加意思がない生徒のなかにも参加したことのある生徒が4名おり、これは当日参加の生徒や友人に連れられて参加した生徒である可能性が考えられた。

Table 4 ワークショップの参加意思と参加経験についてのクロス集計

		参加経験		合 計
		知っている	知らない	
参加意思	あり	17	46	63
	なし	4	497	501
合 計		21	543	564

4) 今後の課題

ワークショップの存在認知と内容認知についての χ^2 検定の結果、ワークショップの存在を知っている生徒は内容もまた認知していることが示された。次に、ワークショップの内容認知と参加意思についての χ^2 検定の結果、ワークショップの内容を知っている約半数がワークショップに参加してみたいと思っていることが示された。また、内容は知らないが参加してみたいと感じている生徒に関しては、参加してみたいが内容がわからずにいるために、実際の参加にいたらない可能性が示唆された。

第3に、ワークショップの参加意思と参加経験についての χ^2 検定の結果、参加意思のある人のうち約37%が実際にワークショップに参加していることが示された。

しかし、全体を通してワークショップの存在認知、内容認知はともに低く、まずはワークショップそのものの存在や、内容をよりいっそうPRしていくことが必要だと考えられた。現在、ワークショップに対する広報は校内2か所のポスターと、毎月発行する広報紙によって行われている。今後は、校内相談室の広報紙で広報するだけでなくワークショップの案内の配布物を作成したり、ワークショップの内容をよりわかりやすく伝える工夫をする必要があるだろう。

5. 被援助志向性との関連

1) 調査方法・調査対象

前述した質問紙調査と同様の手続き・時期・対象に実施された。調査時期は2008年11月であり、調査対象は中学生237名（男子：116名、女子：118名、不明：3名）、高校生335名（男子：155名、女子：170名、不明：10名）であった。有効回答は569名であった。

2) 調査内容

- ① ワークショップの参加経験の有無…「ワークショップに参加したことはありますか」という項目に対し、「はい」もしくは「いいえ」の2件法で回答を求めた。
- ② 被援助志向性…水野ら（2006）は被援助志向性を測定するために、学習面、進路面、心理面、社会面、健康面の5つの問題状況を設定している。本研究においても水野（2006）と同様の問題状況を提示し、これらの問題状況を経験した場合に、校内相談員に対してどの程度相談しようと思うかを「1：まったくあてはまらない」から「5：非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

3) 分析結果

ワークショップの参加経験と被援助志向性の t 検定を行った（Table 4）。その結果、学習以外のすべての領域において、参加経験のある生徒はない生徒よりも有意に被援助志向性得点が高いことが示された（学習、 $F(561) = 1.77, n.s.$ ；進路、 $F(562) = 1.64, p < .10$ ；心理、 $F(21) = 1.95, p < .10$ ；社会、 $F(560) = 3.98, p < .01$ ；健康、 $F(21) = 1.98, p < .05$ ）。このことから、ワークショップに参加したことのある生徒はない生徒に比べて、将来のこと、性格や外見のこと、友人関係のこと、成長や健康のことについて校内相談員に相談したいと感じていることが示された。

Table 5 ワークショップ参加経験と被援助志向性における *t* 検定

被援助志向性	参加経験あり	参加経験なし	<i>t</i> 値
1. 学 習 面	1.95 (0.80)	1.74 (0.83)	1.77
2. 進 路 面	2.10 (0.83)	1.77 (0.89)	1.64 †
3. 心 理 面	1.95 (0.92)	1.55 (0.82)	1.95 †
4. 社 会 面	2.71 (1.42)	1.79 (1.03)	3.98**
5. 健 康 面	2.00 (1.00)	1.56 (0.86)	1.98*

***p* < .01, **p* < .05, †*p* < .10

4) 被援助志向性に及ぼす影響について

ワークショップの参加経験と被援助志向性の *t* 検定の結果、ワークショップの参加経験のある生徒はない生徒に比べて、将来のこと、性格や外見のこと、友人関係のこと、成長や健康のことについて、相談員に対する被援助志向性が高いことが示された。このことから、ワークショップという心理教育的なアプローチによって、生徒の相談員への援助志向性が高まったことが示唆された。心理教育的アプローチは、相談員の顔や専門性について知る機会である。このようなアプローチを実施することで、生徒の相談員への呼応性の不安が低下し、被援助志向性が高まったのではないかと考えることができる。

6. おわりに

本報告では、筆者らが2008年度の一年間を通して行ってきた心理教育的アプローチについて述べた。普段相談室に来室したり、ワークショップに自主的に参加してくれたりする生徒へのアプローチとしては、一定の成果を得ることができたのではないかとと思われる。また、心理教育的アプローチの目的であるコミュニケーションについての成果だけでなく、このようなアプローチを行うことで、校内相談室に来室しやすくなる可能性が示唆された。

最後に、校内相談室における心理教育的アプローチの今後の課題と方向性を述べる。まず、ニーズがあるにもかかわらず、参加することができない生徒への介入についてである。校内相談室に来室することやワークショップに参加することは、あくまでも本人の意志が必要である。もちろん自由来室・自由参加のメリットもあるが、援助ニーズがあるが参加できない生徒への介入を考えることは、教育相談上重要なことである。

次に、中学生と高校生のニーズの違いを反映した内容をどのように作成していくかについてである。A校は中高一貫校であり、中学生と高校生の発達段階差を考慮する必要がある。我々の実践の中でもある程度課題設定を配慮したが、実際に適切なものであったかどうかについては検討できていない。今後、さらなる充実を目指す必要がある。

最後に心理教育的アプローチの効果測定についてである。前述したように、今回のワークショップはコミュニケーションをテーマとしていた。しかしながら、実生活への般化については扱えていない。心理教育的アプローチのねらいとも関わる部分であるが、今後方向性を模索する必要がある。

【文献】

- 石隈利紀（1999）学校心理学 ―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス― 誠信書房
- 木村真人・水野治久（2004）大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について ―学生相談・友達・家族に焦点をあてて― カウンセリング研究, 37, 260-269.
- 水野治久・石隈利紀（1999）被援助志向性・被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- 水野治久・石隈利紀（2001）アジア系留学生の専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連 教育心理学研究, 49, 137-145.
- 堀田愛（2006）中学生・高校生の被援助志向性に関する研究 ―校内相談室に来室しない理由に注目して― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科, 平成18年度修士論文（未公開）

陽だまり 6月号

平成20年度 (学校名)
(相談員名)



あか〜どうしよう・・・
友達を怒らせちゃったよ。

そうか、それはいかなのう。

早く怒やまったらほうがいいんじゃないか？



そうですよね、先生。でも、どうやって・・・
メール？電話？やっぱり直接言うのがいいかなあ？

ふおおっふおおっふおおっ。伝え方にもいろいろあるのう。
それぞれどちらがうんじゃろ？

第1回 コミュニケーションって？

みんなはコミュニケーションという言葉を聞いたことがあるんじゃないか？コミュニケーションとは、周りの人と考えや気持ちを伝え合うことじゃよ。だから、メールも、電話も、直接話すことも、全部コミュニケーションの一つなんじゃ。ただ、その方法や伝えられる内容がちがうんじゃな。メールは文字や絵文字だけを使って伝えるものじゃが、電話では声の調子も一緒に伝えることができるのう。また、直接話せば、表情や動きでも伝えることができるのう。例えば、電話にしろを待せたり、うなずいたりすることだって、コミュニケーションの一つとして考えられるんじゃ。こうして考えると、みんなは普段から自然といるるな方法でコミュニケーションしていることに気づくじゃろ。一匹、自分がどんなコミュニケーション方法を使っているか、考えてみると面白いんじゃないかな。

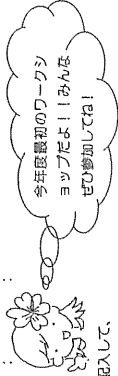
※ よつばちゃんのワークショップのお知らせ

6月のテーマは、『自分のコミュニケーションを振り返ってみよう！』だよ！

◎日時 中学生：6月 日() : ~ :
高校生：6月 日() : ~ :

◎場所 相談室

◎申し込み方法 下の申し込み用紙に記入して、図書室前か、相談室前のポストに入れてね。



今年度最初のワークショップだよ！みんなぜひ参加してね！

※6月の開室のお知らせ

開室時間は15:00~17:00です。閉室日は日、日です。どの相談員がいるかについては、よつば相談室前にあるホワイトボードで確認してください。自由にきていただくことができますが、予約をすれば、他の人に聞かれないこととお話することができます。その場合は下のよつば予約カードに記入して、図書室前か、よつば相談室前のポストに入れてください。予約を受け付けましたらホワイトボードに記入して連絡しますので、必ず見てください。

※キリトリ

◎口字予約カード口 連絡時に使う名前(ペンネームなど) () あなたの学年とお名前 (中学・高校) ()年()組 名前() 希望する日時 時間帯には○をつけて下さい。 ()月()日()曜日 8時半~ 4時半~ 4時半~ 希望する相談員がいれば以下に○をつけてください。 月曜：(担当相談員名) 火曜：(担当相談員名) 水曜：(担当相談員名) 木曜：(担当相談員名) 金曜：(担当相談員名)	◎口ひかえ口 連絡時に使う名前 () 希望相談日時 8時半~ 4時半~ 4時半~ 4時半~
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------

※キリトリ

◎口ワークショップ申込み用紙口 連絡時に使う名前(ペンネームなど) () あなた(代読者)の学年とお名前 (中学・高校) ()年()組 名前() 参加人数 (グループで申し込みの場合) ()人	◎口ひかえ口 連絡時に使う名前 () 日時 / ()
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------

資料3 ワークショップのアンケート用紙



☆ワークショップの感想☆



※当てはまる数字に○をつけてください♪

1. 全体的に、今日のワークショップはどうでしたか？

全く満足しなかった ← 1 2 3 4 5 → とても満足した

2. 今日の内容について、より興味がわきましたか？

全くわからなかった ← 1 2 3 4 5 → とてもわいた

3. 今日の内容は、わかりやすかったですか？

全くわからなかった ← 1 2 3 4 5 → とてもわかりやすかった

4. 今後、ワークショップでやってほしいテーマはありますか？ ある人はぜひ書いてください☆

5. その他、感想や意見を自由に書いてください☆



質問は以上です。ありがとうございました！
次のワークショップにもまた来てくださいね！